
別れたくない.....

彼方 ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別れたくない……

【Nコード】

N2190P

【作者名】

彼方 ヒロ

【あらすじ】

楓は、ある日行きつけのファーストフード店で、一人の美少年と出会う。二人はその日から、何度もその店で会うが……。他小説サイト、ブログ、HPより転載

風に乗って、焼き菓子に載ったキャラメルソースのふんわりした香りや、鯛焼きの芳ばしい餡の匂いが漂ってくる。

私は今、デパ地下のお菓子売り場の前に立っている。たくさんのお店が視界一杯に立ち並び、私はその光景を見て、ただただ啞然とするばかりだ。

クレープ屋、ケーキ屋、アイスクリーム屋。

わくわく、おいしそうだなあ。

思わず一步を踏み出して、ケーキ屋のショーケースに手を貼り付けた。すると、

「いらっしやいませ！」

明るい顔のお姉さんに声をかけられて、思わず財布を取り出す。

そして、硬貨の数を確かめた。

しかし、そこで、待った！ と理性が叫び始める。

ケーキは昨日も買ってたじゃない！ このまま毎日食べ続けてたら、太るわよ！

天使の格好をした私が指を突きつけてきて、叱咤した。

そこで、私ははっと我に返る。

そうだよね……食べ過ぎると太っちゃうし……。

硬貨をお財布に戻そうとした。

しかし、そこで、悪魔の格好をした私が矢印のついた棒を振りかざして、居丈高に叫ぶ。

二日連続食べたくらいで、どうなるってことじゃないよ！ 断固として買うことをお勧めする！ 見よ、あのケーキの上に乗った、ふわふわのクリームソースを！

私は思わずショーケースの中をのぞきこんでしまった。

ヤドカリの貝殻のように積み重ねられたクリームソース……それと、つややかな光を放つイチゴ……もう、もう、我慢が！

私は再び財布の紐を解く……すると、そこで、駄目よ！ お金の無駄遣いはいけないわ！

天使が悪魔の前に進み出て、私を諭そうとした。すると、悪魔は何をこの！ と天使を押しつけ、自分こそが前へと進み出ようとする。

この、どきなさいよ！

あんたこそどきなさい！

天使と悪魔はもみくちゃになりながら、そして私は財布のチャックをギコギコギコ開け閉めして、涎を垂らすばかりだ。

「あの……お客様？」

店員が苦笑している。

私は迷った末、とうとう硬貨を取り出して、店員に差し出した。「ショートケーキを、二つください……」

私はケーキの箱を見下ろして、大きく溜息を吐く。

また、買っちゃった……。

よりにもよって、どうして二つ買っちゃったんだろう……。いくらなんでも二つは多いよ……。

と、思いつつ、

ま、いいや。お母さんにあげよ。

紅茶は何にしようかな……とか考えながら、行きつけのファーストフード店の扉をくぐった。

その途端、フライドポテトの芳ばしい匂いが鼻をついてくる。それだけでなく、ジャズピアノの大人っぽい旋律がひっそりと頭の後ろの方に漂ってきて、私は自然と頬を緩めた。

学校の帰りには、いつもこの店に寄っている。人もそんなに多くなくて、わりと静かなのが本を読むのにちょうどいいのだ。

一番隅の席を確保して、カウンターの列に並んだ。ふと振り返った時、後ろに並んでいた人と目が合う。

透き通るような、綺麗な瞳。思わず視線が吸い寄せられた。

視線と視線が絡み合い、すぐに繋がって、その人の感情が私の心の中に流れ込んできた気がした。

それは、甘く、そして切ない感情。

私は息を止めて、その人の瞳をじっと見つめる。

その人がふと微笑んだ。私は、はっと我に返る。

そして、まごついた。

「えと、あの」

私は金魚のように口をパクパクさせながら、顔を真っ赤にさせる。視線は彼の顔に吸い寄せられたまま……。

私と同じ年ぐらいの、高校生だった。紺色のベストを着た制服姿で、さらさらの髪が艶やかで、肌は真っ白で、まるでお人形さんのようだった。整った眉、形の良い唇……髪が長かったら、間違いなく女の子だと思っただろう。

私は口を半開きにしながら、彼の顔をじっと見つめる。

鼓動が激しく脈打っていた。

うわ……うわ……すごいよ……すごいよ、この人……。

彼は突然すつと腕を上げ、人差し指を私へ突きつける。

「前」

彼の声は、女性のように高かった。私はその声に、胸の鼓動がさらに激しくなったのを感じる。

すると、彼は一層前を強く指差し、言った。

「ほら、前」

その途端、突然私は顎を掴まれる。柔らかい肌が私の頬を包み込んだ。

私は驚いて、ひょわつと声を上げる。

彼は私の顎を一気に横へ向けさせた。

その途端、カウンターの前の店員が、困った顔をして、私を見つめているのに気付く。

「お客様……お、お決まりでしょうか？」

「すすすすみません！」

私は慌てて前へ向き直り、カウンターに詰め寄った。
その時、危うく足を絡ませて、こけそうになる。

「……おっと」

私の背中に、暖かな体温が密着した。

振り返って、ドキツとする。

彼がバランスを崩した私を抱きとめてくれたのだ。

至近距離に彼の顔があって、胸がバクンバクンいつてるのを
感じながら、息を止めて彼の顔を見守る。

その途端、

「うげっ」

彼が明らかに引きつった顔をした。

「フーッー」と熱い液体が私の鼻から流れ落ち、その瞬間蛇口か
ら出る水のごとく、ドバシャツと鼻血が噴き出る。

「ただだ、だいじょうぶっ!？」

彼は慌てて近くにあったティッシュを取り、私の鼻を押さえた。

「ははは、はい大丈夫です!!」

私はパニックになって、目をぐるぐる回しながら言う。

数分後。

私は鼻血が止まったのを確認して、じっと私の様子を見守ってい
た彼に振り向き、腰を折る。

「本当にすみませんでした! あまりにすごいので、興奮して……」
何言っただ、私。本音が少し混じってるよ……。

「よくわからないけど、体は大事にしてね。気をつけて」

彼はそう言っ、私の肩をぼん、と叩くと、手を上げてカウンタ
ーに近寄っていく。

「い、いい人だ……」。

私はティッシュを片手に、彼の後ろ姿を見つめる。

どこの高校かな……あの制服、桜木だっけ?

頭がぼーっとして、思考がまとまらない。また鼻血が……。

私は彼の後姿をじっと見たくて、もう一度カウンターに近寄ってしまう。

彼がホットコーヒーを頼むのを聞きつつ、私はごそごそと鼻にティッシュを詰めて、彼の後姿を眼の奥に焼き付ける。

細長いシルエットが、網膜に柔らかい湿り気を伴って染みこんでいく。

どうしてこんなに胸が疼くんだろう。彼の姿を見ていると、切なさに入り混じって、何故か目を背けたくなるような後悔と罪悪感が胸を掠めていく。

胸の鼓動が激しい。全身の血が、彼の温もりを求めて、騒いでいる。

なんで、初対面の人を意識しているんだろう。馬鹿らしくて、自分を叱りつけてやりたいのに、それでもどうしても心が彼に吸引されていく。

彼の横顔がちらりと見えると、その途端、私の頭に誰かの顔が映される。

ノイズの向こうに、誰かの白い顔……。

私は激しく高鳴る胸を手で押さえて、唇を噛む。

今日の私はおかしい。本当にどうしたんだろう。

結局私はオーダーせずに、元の席に戻る。

ケーキの箱をじっと見つめて、鼓動が落ち着くのを待った。

ようやく血の疼きが収まって、私は無意識にケーキの箱を開いて、中からショートケーキを一つ取り出した。

でも、彼のことや頭の中心に浮いていて、それについて色々と考えてしまい、やっぱり今日の私はおかしい……。

私は気付かないうちに、ケーキを手づかみでつかんで、かじりついていた。

舌にまとわりつく、柔らかな甘さ。

唇を包み込むホイップの優しさ。

「おいしいな……このケーキ」

私は思わずつぶやく。

「大胆な食べ方だね……」

突然声が聞こえて振り向くと、じつとのぞきこんでくる彼の水晶のような瞳と自然と向き合うことになる。

私は悲鳴を上げて、ケーキを振り落としそうになる。

ちよつと待つてっ！……！！

口元をホイップまみれにした私は、焦るあまりにケーキを一気に口の中に詰め込んでしまう。何してるんだ、私は！

そんな中、彼の口元には小さな微笑み。

やがてすつと硝子細工のような指が、私の頬に当てられる。

曲線を描く爪が私の頬に直線を刻む。

彼は指でホイップをすくうと、自分の口へと持っていく。

時が止まったような気がした。

やがて彼の口が閉じられ、歩みを止めた真っ白な世界が動き出す。

「すごく甘いね」

彼はにっこりと微笑んで、私を見つめる。

「な、な、な……」

私の顔はこれ以上はないというくらい真っ赤になった。

「何をするんですかっつっ！……！！」

自分の腕が掻き消えるのがわかった。その瞬間、彼は床に転げ落ちる。

「ゲフツ！」

私は肩で息をして、見下ろしながら、ごちゃ混ぜになった頭の中で思考を転がす。

そして、自分のやってしまったことに気付く。

え？ え？ 私は今……何をやった？

「痛つたいな……殴ることないじゃないか」

彼は目の縁に涙を溜めて、ジト目で私を睨む。うわああああ、何やってんだ、私！

「すみません！ 本当にすみません！ 本当に驚いて、それでつい

……」

私の言葉は尻すばみになって消えていく。本当に何をしているんだろう。

彼に出会って浮かれて、それだけじゃなく、勢いあまって彼を突き飛ばし……駄目な子だ、私。

私は彼の前にしゃがみこみ、手を握って、引き起こす。そこで、違和感を感じる。

なんだろう。

私はその違和感をとりあえず頭の隅において、彼が立ち上がるのを見届けてから、深く深く頭を下げる。

「ほんつとうにすみませんでした！」

「いや、いいよ、僕もいきなりホイップをなめたりして、悪かったよ。今度からは顎下についたやつにする」

「そういう問題じゃないですよ！」

私は思わずもう一度手を振り上げそうになる。彼はその瞬間、「わあっ！」と悲鳴を上げて、近くにいた女性の背後に隠れる。

「なあに、恋人と喧嘩？」

女性が彼に笑いかける。

「彼女が僕の浮気に気付いて、それで怒るばかりで……」

女性は「ほどほどにするのよ？」と頭を撫でて彼を送り出す。

彼はちゃっかりもらったポテトを頬張りながら、戻ってきて、私はもう脱力して、席に座り直した。何やってんだ、私……。

彼は私の背後に立つと、「隣に座っていい？」とにこやかに訊いてくる。もう勝手にしてください……。

私の倦怠感溢れる視線を受け止めて、彼はくすくす笑いながら、トレイを自分の前に持ってくる。

「ごめんね。なんだか君、反応面白いから、からかうとついついやめられなくなるんだもん」

「ひどい性格してるんですね」

私は唇を尖らせてそっぽを向く。

「友達には笑う小悪魔と言われています」

「女の子みたい」

「たまに女装してみたりするんだよ？」

彼は長めの髪を払ってみせる。

その姿を想像しそうになって、慌てて鼻にもう一個ティッシュを詰め込む。

本当は、彼が隣にいただけで、胸がはちきれそうなほど高鳴っているのだ。どうしても真正面から彼を見つめられない……。

どうしても、こんな気持ちになるんだろう。

ふと、頬に視線を感じて振り向くと、彼が私をじっと見つめていた。

どこまでも透き通った瞳。

私は思わず体を引いてしまう。

それでも、彼は顔を近づけてくる。何？ 何なの？

「もっと近くで見せて」

彼の声は、驚くほど強張っていて、感情がこもっていなかった。

その言葉には、有無を言わせない迫力があって……こめられたその感情は怒りだった。

どうして……？ 私が何かした？

体温が奪われて、冷たくなった汗が背筋を伝い落ちていく。

彼はじっと私を見つめ続ける。やがて私の肩をつかむと、引き寄せてくる。

「やめて……」

彼はそれでも私の肩に指を食い込ませて、至近距離から私の顔を見つめてくる。

青白い透き通った肌が目の前に迫る。

彼は無表情のまま、視線で私の顔をなぞった。

「……やっぱり、似ているな」

「え？」

私の問いは、空気にたなびいて、やがて彼の鋭い視線に断ち切ら

れてしまう。

怖い。さつきまで胸にあった甘ったるい感情はすべて凍りつき、それは恐怖に変わっていく。

「名前を聞いてなかったよね。なんて言うの？」

彼の唇は震えていた。言葉が喉に詰まって、体が硬直する。

「ねえ、なんて言うの？」

凍てついた言葉の切っ先が、私の喉に突き当てられる。

「か、楓……」

「え？」

「美里楓……」

私の唇から零れた言葉が、彼の顔を瞬時に凍りつかせた。

彼は拳を握り締めて、肩を震わせて、私の顔を睨む。

憎しみのこもった瞳。けれど、その感情は瞳から徐々に零れ落ちていき、最後に悲しみだけが残る。

彼は自嘲げに笑うと、

「そうか。美里って言うんだね」

その消えかかりそうな、今にも地面に落ちて割れてしまいそうな声に、私はどうしようもない無力感を感じる。

この人は、どうしてこんな顔をするんだろう。

私の何が、彼を悲しませたの？

なんで、そんなつらそうな目で私を見るの？

私は気付けば、彼を至近距離から見つめていた。あと数センチで唇が触れ合いそうな距離。

私は何か言葉を紡ぐようにして、けれどすぐに単語の一つ一つが地面に抜け落ちていってしまう。

私は馬鹿じゃないのか。まだ会ったばかりなのに、彼の心に踏み入ろうとするなんて。

それでも、私はどうしてもその言葉だけは言わずにはいられなかった。

「あなたの、名前を教えてください」

つぎはぎだらけの、冷え切った声。

すると、彼は私の顔を見つめたまま、「比留間 翔」と答える。

——比留間 翔。

その言葉が耳に入った瞬間、私の中で何か抗いような罪悪感がこみ上げてくるのを感じた。

何か、禍々しい記憶が私の脳から動き出して、私はそれを必死に押し留めようとしている。

誰かの顔が脳裏に浮かんできた。

反射的にそれを押し込める。たぶん、これを見たら、私は――。

一緒にいるだけでこうなのだ。もし、このまま顔を突き合わせて、何か言葉を並べたてたら、おかしくなってしまうかもしれない。

けど。それでも――。

私は伏せていた視線を上げる。ちょうど彼も瞳を上げたところだった。

お互いの濡れた瞳が向き合う。

「よろしくね、楓さん」

彼は、私に穏やかな、とろけてしまいそうな笑みを向けて、手を差し出してくる。

先ほどまでの激情は、彼の顔からは消えていた。

私はうなずき、彼の手を握る。そして、違和感を感じた。

握られた手と手を見下ろした。そつと絡み合った指を解いて、彼の手を見つめる。

無骨な手の平に、無数の切り傷やあざができていた。今にも血が滲んできそうな、まるで悲しみの刻印。

彼は私の視線に気付いたのか、そつと手の平を離す。

「下の名前で呼んでもいいよね？　なんだか君の苗字、初めて聞いた時から嫌いなんだ」

彼はそう言って笑うと、ホットコーヒーを一口飲む。湯気の手を見ると、彼の白い頬に一筋の透明な線が流れたような気がして、でも、きつとそれは錯覚だろうと思ひ直す。

とくん、とくん、と鼓動が高鳴る。

甘いようで、それでいて胸に焼け付くような禍々しい感情がわだかまっっていく。

なんなんだろう、これは。

先ほどの張り詰めた空気が嘘であつたかのように、彼は明るく話した。私も、自然と笑顔になる。

本当に、さっきのが嘘みたい。楽しそうにしている時の彼は、見ているだけでこちらが嬉しくなりそう……。

「兄弟は、いるの？」

でも、彼がそう聞いた瞬間、わずかに空気が揺らいだ気がした。彼の笑顔が少し翳ったような……。

なんだろう、私を見る彼の瞳が、また鋭くなつた気がする。でもこう言わずにはいられない。

「います。兄が一人。笑顔がよく似ていると言われます」

「そうだろうね」

彼はそう言つて、俯いてしまった。少し肩が震えている。

私が声をかけようとした時、突然彼は顔を勢い良く上げる。

「僕にも姉がいるよ」

その声の暗さに、私は息を呑む。

「僕にとって、絶対に忘れられない存在」

忘れられない存在……それって……。

「そして、絶対に忘れちゃいけない存在」

彼はそう言つて、再び俯く。

今、彼の顔にどんな表情が浮かんでいるのか、想像したくもなかった。

先ほどまでの楽しい空気が瞬時に消えてしまった気がして、私は濁った空気をかき消したくて、何か言おうとする。

「なーんちゃってね」

彼はそう言つて、ゆっくりと顔を上げる。その顔は可笑しげに笑

っていた。

「うちの姉は今でも元気にやってるから安心して」

なんだか焦った自分が馬鹿みたいで、頬を膨らませて彼を睨む。

「あ、怒っちゃった？」

彼は笑うと、私の背中をバンバンと叩いて、私を咳き込ませる。

何するんですか！

「姉さんに教えられたの。怒った人にはスキンシップが一番だって」

「そんなこと、本当に真に受けてるんですか！」

「そうだよ……ほら」

そつと彼は私の肩に手を回してくる。私は顔を真っ赤にして、彼の腕を取ると、体落としを放った。

彼はもろに床に背中をたたきつけて、わめきだした。

「痛いっ！ 投げなくなつて！」

「自業自得です！」

彼は仕舞いに先ほどの女性のところへ避難して、またナゲットをもらって帰ってくる。

「文芸部員のくせに、なんで柔道なんてできるのさ」

「なんで、私が文芸部にいるの知ってるんですか？」

すると、彼は笑いながら、再び私の背中を叩いてくる。もうやめてくださいよ！

「それは秘密ってことで……」

彼はもう一度席に座りなおした。私は溜息を吐いて、彼の肩あたりに視線を落とす。

そのまましばらく沈黙が私達の間以降りる。それを居心地悪いと感じなかった。

けど、何か言わないと、彼が気を悪くしたらやだな、とも思ってしまう。だから、こんなことをつい聞いてしまった。

「夢はありますか？」

すると、彼は笑い出して、再び肩に手を回してこようとしたので、私はその腕をつねる。

「夢ね。強いて言えば……まともな人生を送りたいね」

彼はそれを本気で語っているようだった。なんというか、目が真面目なのだ。

「まじめで誠実な人間になることが僕の夢だ。非行に走るなんて、もつての他だ」

「非行」という言葉をつぶやいた途端、彼は突然険しい顔で唇を噛む。

まただ。また負の感情が彼を連れて行ってしまう。

私はすかさず言う。

「それなら、警察官になつたらどう？」

その瞬間振り向いた彼の顔を見て、私は呼吸を止める。

その、憎しみとも哀しみともつかない感情を滲ませた、歪んだ表情。

彼は私の顔に誰かの顔を重ねて、その人に対して憎しみの視線をぶつけて、齒軋りする。

なんて……なんて目をするんだろう。

「警察は嫌いだな。肝心な時に何もしてくれない。あいつらが一番不誠実でいじきたない人間なんだよ」

私は言葉を返せなくなる。もうやめて、と言いたかった。どうしても普通に楽しい話だけをするのができないんだろう。一体何が彼の心を負に染め上げているのか……本当に悲しい気持ちになった。

彼は視線を伏せて、唇を噛んで黙っていたけれど、やがて元の笑顔に戻る。

「僕にはとてもじゃないけど、警察官になる資格なんてないよ」

私は彼と目を合わせられなくて、手を握り締める。

何か彼の力になりたいのに、どうしても心の溝がそれを邪魔する。私と彼はまだ出会ったばかりだ。こんな、心に踏み込んでいく真似はおかしい。

私が目を伏せて黙り込んでいると、彼はトレイを持って立ち上がっていつてしまう。

そして、戻ってきた彼は、穏やかに微笑んで、私を見つめる。

「じゃ、僕はこれで帰るから。僕にも、待っている人がいるんだ」

「お姉さんですか？」

私はどうしても沈んだ声で答えてしまう。

すると、彼は顔を歪めて笑い、「違うよ」とつぶやく。

「こうして出会えたのも、僕らが似ているからだよ」

私はその言葉に、顔を上げる。私達が似ている？

「明日もこの店に来るから、もし君を見つけたら声かけるね。……

いいよね？」

私はうなずいてしまう。

すると、彼はすつと近寄ってきて、突然……抱きしめてきた。何これ……どうということ？

「スキンシップは、落ち込んでいる相手にも有効だって姉さんが言ってたよ」

そう言って、彼はばんばんと私の背中を叩く。

顔が熱くて、彼の顔を見ていられない。

「……というのは、嘘。こうしなくちゃ、君に対する気持ちだが、揺らいでしまいそうだから」

そう言つと、彼は「じゃあね」と声を上げて、店を出て行く。

最後に残ったのは、彼の髪の匂い。私は肩に鼻を近づけて、かいでしまう。

また会ってくれと言ってくれた。それだけで、本当に嬉しい。

この感情を、一文字の言葉で言い表したら、すべてが終わってしまふような気がした。

だから、私は置いていたはずのケーキの箱が消えていることに気付いても、何か言葉を出す前に、笑うことにした。

この気持ちは、きっと明日も明後日も変わらない。

翌日、学校で授業を受けている際も、ずっと彼の姿が頭にちらついて、集中できなかった。

なんて定石通りの展開だと思う。こんなの、どこかの恋愛小説か少女漫画に出てきそうな陳腐なシチュエーションでしかない。

……でも。

なんでこんなに胸が締めつけられて、こんなに水水しい感情がわいてくるんだろう。

本当に不思議。

私は学校が終わると、すぐにあのファーストフードの店に向かう。昨日はああ言っていたけど、本当にいるのかな……。

こんなに心の中が満たされたのは何年ぶりだろう。

ようやく店が見えてくると、自然と小走りになる。

息を止めて、胸に手を置き、ガラス壁をのぞきこむ。

カウンター前の列にちらりと見えた薄茶色の髪。

私の頬は綻んでいく。

扉を開く手が震えていた。

会えた。本当に、会えた。

私は小走りで奥へと進むと、そっと彼の背後に寄り、肩を叩こうとして、彼の雰囲気ごとことなく違うことに気付く。

「AとBどっちにしようかなー。やっぱり消防車の方がいいかなー赤いサイレン鳴るし、水噴き出るし。でもバスは長いからなんかヴィジュアル的にいいんだよねー」

彼は頭を押さえて、ぶつぶつぶやきながら、悶えている。

「何してるんですか？」

私がつぶやくと、彼は頭を押さえたまま、くるりと回転して振り向く。

「やあ……楓さんは、やっぱり消防車派？」

「知りませんよ、そんなこと！」

すると、彼は拗ねた目で私を見て、後ずさる。

ちょうど彼の前に並んでいた女性に彼は歩み寄り、「彼女が僕をいじめるんです……」と言ってますがりつく。彼女も彼女で、「可哀想に」と肩を抱きかかえて、さすっている。なんでこの店に来る人

は、こんなにノリのいい人ばかりなの？

仕舞いには、彼は五百円玉をもらって戻ってくる。どんな気前のよさだよ！

「彼女に金をせびられて、困ってるって言ったら、もらった……」

「何もらってるんですか！」

私は硬貨を取り上げて、女性に返してしまう。彼女は爆笑。こいつ、わざとやってたな……。

ようやく彼にオーダーの番がきて、彼はメニューに飛びつくと、叫びだす。

「ハッピーセット！」

「おい！」

私は思わず彼の肩をつかんでカウンターから突き放す。もしかして、さっきまで悩んでたのはそのことなの！？

「なんだよーいいじゃんか、ハッピーセット！」

そんな泣きそうな目で見られると、もう何も言えなくなる。すみません、私が悪かった。

解放すると、彼は元気な声で、「ハッピーセットのAで！」と叫ぶ。

彼はおもちゃをもらって、ウキウキと戻ってくる。結局選んだのは、消防車。

「この小さなおもちゃが欲しくてね」

私は何か突っ込もうとして、でも、彼が本当に嬉しそうな顔をしているから、言葉を飲み込んでしまう。

「……きつと喜ぶだろうなあ」

ふと声が聞こえた気がした。彼を見つめると、すでに彼はおもちゃをカバンに仕舞って、ポテトをばくつきながら歩き出している。

「昨日の席でいいでしょ？」

ふと彼が訊いてくる。私はうなずき、ホットコーヒーとアップルパイを頼んだ。

「でも、なんでハッピーセットなの？」

と私が席につきながら言うと、彼は「もうその話はお仕舞い！」とテーブルを叩く。はい、そうですか。

私がむすつとした顔で、ホットコーヒーを啜っていると、彼がじつとこちらを見つめていることに気付いた。

私は、彼の瞳を見つめ返す。

息を止めて、彼のきらきらした宝石に目が心が吸い込まれていく。彼はじつと動かないまま、私を見つめている。

一秒、二秒が流れていき、鼓動が時間と共に激しくなっていく。長い時を、瞳と瞳が交差して、弾ける波のような鼓動の音を耳にしていた。

やがて、彼の手が私の顔へと伸びてくる。

触れた瞬間に、全身に杭が打ち込まれたような気がして、大きく震える。

彼の指が私の唇に触れる。

何？ 何なの？

さらに彼は顔を近づけてきて――。

どうしたらいいんだろう。

そんな中、彼の口が開いて――。

「唇の端、切れてるね。血が滲んでる」

彼は私の唇の端を指でなぞると、そつとカバンを開いて、救急セツトを取り出してくる。

なんだ……本当にびっくりした……。

それにしても、なんでこの人はわざわざ誤解を生むような行動を平気で取るんだろう。

私がジト目で彼を睨んでいると、彼は器用な手つきで救急セツトからガーゼを取り出しながら、「何？ 僕をまるで汚物のように見て」と泣きそうな目をする。

「翔さんは女の子と接する時、いつもそんなんですか？」

「そんなって……どんな？」

彼はきよとした顔で首を傾げてみせる。やっぱり自覚ゼロな

のね……。

私が溜息をついて、視線を自分の手の平に向けていると、ふと柔らかい感触が頬を過ぎる。

唇の端に触れる彼の小指。壊れ物を扱うような優しい手つき……本当に優しい、まるで母親の温もり。

彼の優しさは反則だ。

私の心の壁を突き破って、するりと深いところにもぐってきて、たちまち包み込んでしまう。

この温もりを感じられるだけで本当に幸せ。

私の目は細められて、彼の指に包まれたガーゼが私の頬を撫でる。どこまでも優しく、それでいて確かな意志を持った指先。

彼は指先でガーゼをとんとんと叩いて、私の血液をそれに湿らせる。

「ほら。おさえていて」

私はただ無言で、ガーゼを手にする。ちらりと瞳を向けると、彼はどこまでも優しい瞳を私の唇に向けている。

とくんとくんと、鼓動が高鳴る。

時間が止まってしまえばいい。そんな陳腐な言葉さえも、胸に温かく響いていく。

やがて彼の指が、私の頬をなでて、離れる。

「少し食べすぎなんじゃないの？」

彼の無邪気な笑顔。

「女の子になんて失礼なこと言ってるんですか？」

私は頬を膨らませて、そっばを向いてしまう。頬が緩んでいるのが見えないように。

彼のこの優しさは、きつと親しい人に向ける共通の愛であって、たぶんそういう感情からはきていない。

だけど、私の瞳には、どうしても期待の灯火が点ってしまふ。それは抗いようのないこと。

私が彼を想っている限り、願わずにはいられない本音。

「……ありがとう」

やがてつぶやかれる私の感謝の言葉。彼はうなずいて、救急セットをカバンに仕舞う。

彼の香りがついたガーゼ。

薬臭くて、でもお日様の匂いがする。

私は片手でガーゼを唇に当てながら、ぼつりとつぶやく。黙っていると、この気持ちが膨らんでしまいそうだから。

「それにしても、どうして救急セットなんて持っているんですか？
用意周到ですね」

私がそう言くと、急に彼の笑顔が崩れる。

どこで言葉を誤ったのだろう。彼の目が哀しみに揺れ、下を向いてしまう。

噛まれる唇。震える拳。

彼は俯いてしばらく黙っていたけれど、笑顔を作って私に答えてくれる。

「よく使ったよ。これがないと、僕はたぶんひどいことになっていたと思う」

そう言つて、彼はポテトを指で握りつぶしてしまった。

残骸が床に零れ落ちて積み重なる。

私は言葉もなく、彼の横顔を見つめることしかできない。

彼は溜息にも似たものを口から吐き出し、ドリンクに目を落とすてしまう。

その瞬間、思い切りそれを煽る彼。

私もコーヒーに口をつけて、その苦い味を舌にぬりたくる。

その時、大声を立てて笑う声がすぐ真後ろから聞こえて、私は振り向く。

高校生の集団——どの男の子も髪を染めていて、服装は乱れ、ピアスが揺れ、あきらかにこの店の空気を汚していた。

でも、私はその汚れを嫌いだとは思わない。

だって、私は——。

その時、私は彼が不良達を険しい視線で睨んでいることに気付く。彼は言った。

「人間には、生きる価値のない奴も、少なからずいる。そんな奴らには優しいさんかいらない。正義の鉄槌だけが必要だ」

彼は額を手で押さえて、笑い声を漏らす。でも、徐々にその濁った瞳が透き通っていき、最後にはまたあの悲しそうな笑い顔。

「言ってみただけだよ」

彼はそう言って、不良達から視線を外し、私をじっと見つめる。

「僕はね。どうしようもなく男をやめたいときがあるんだ」

私の耳にその言葉は不確かな響きをもつてなだれ込んでいく。どういう意味？

彼はちらりと私を見て、笑う。

「言葉どおりの意味だよ。いつそ女になることができれば、母になることの痛みを理解してあげられたのに」

私がかつぶやく前に、彼は席を立つてしまう。

彼が化粧室から戻ってくるまで、私は突っ立ったままだった。彼は化粧室から出てきて私に気付くと、駆け寄ってきて、「何突っ立ってんの！」と私を座らせる。だって……。

「君って本当に生真面目だよ。僕のテキトーさを少し分けてあげたいくらいだよ！」

そう言って、彼は私の手を叩く。

「……あのさ。はつきり言うけど、いい？」

一体何の話だろう。

私はとりあえずうなずいておく。

「君、友達いないでしょ」

私はその瞬間、顔が熱くなるのがわかって、彼に関節技を決めてしまう。

この人はっ！なんてひどいこと言うの！

「痛い！ ごめんごめん嘘嘘、ギブギブッ！」

私は一層強く腕を締め付ける。

仕舞いには彼はぎゃあっ！ と叫んで私の太ももに指を食い込ませる。

ようやく頭の熱が冷めていくのを感じ、彼の間接を解放する。すると、彼は目の縁に涙を浮べて、私を睨んでくる。自業自得です。

私は視線を落として、唇を噛む。

「だって……」

私の口から、湿った溜息が漏れていく。

「私のせいじゃないもの。友達、作りたくても、できないから」

彼はその言葉を聞いた途端、真顔で私の瞳を見つめてきて、ふと肩に手を置いてくる。

「確かに君のせいじゃない。それはきつと、他の誰かのせいだ」

私は目を見開いて、彼を見つめる。

「それはわかってる。けど、それは理由にならない。運命は君の意志で動いてるんだ。あきらめたままの自分が、一番いじきたなくて僕は嫌いだ」

嫌い。今、この人は私を嫌いだと言った……。

彼は私の濡れた瞳を受け止めて、くすりと笑い、首を振る。

「嫌いだけど、君のそういうところも好きなんだ。矛盾してるけど、それが僕の答え」

私の心は彼の色で染まっていく。

教室の隅で一人きり。ずっと本を読みふける無言の女子。

誰一人声をかける人はいなくて、ずっと孤独をかみ締めて、それが世界なのだとあきらめていた自分。

それを彼は、嫌いで、好きだと言ってくれた。その矛盾が嬉しくて。

私は自然に、満面の笑顔を彼に向けていた。

彼は私の顔を見て、目を見開き、食い入るように見つめてくる。

「……君は本当に」

彼の口から震える声。

私は首を傾げてみせる。彼は「なんでもない」と首を振り、黙り込んでしまう。

何度目かの沈黙。

でも、もうその沈黙の寂しさを私は乗り越えた。

沈黙の中でも、通わせる言葉はある。それを私はいつのまにか知っていた。彼に教わった。

すると、彼は苦笑して振り向いて、私の顔を見つめだす。

「君の家族、どんななの？」

突然話が変わった。どんな、って結構ひどい言い方のような気がする……。

「答えてよ」

「うちは再婚です」

すると、彼の眼の色が変わった。

彼ががばつと身を乗り出してきて、私の肩を掴む。

「やっぱり子供は親が再婚すると嫌かな!？」

一体……何の話？

私は頭がクラクラするのを感じながら、彼の腕の中で震える。

「ねえ、どうかなっ!？」

彼の懇願の眼差し。

私はしどろもどろになりながら、

「結論から言っと、」

「うん!」

私は彼の目を見て、少し罪悪感を感じながら、

「再婚なんて嫌に決まってるでしょ?」

すると、彼は明らかに落胆して、下を向いてしまう。

「でも」

彼の瞳が上がる。

「それがとてもよい家族なら、再婚もアリかなって思う」
彼の目が見開いた。

「だよね！」

突然彼は立ち上がって抱擁してきた！ 何を考えているのよ、この人はっ！

「そうだよねっ！」

彼のウキウキとした視線とぶつかる。

彼は突然私の肩を掴んで立ち上がらせ、背中を押してくる。何？ 何なの？ 私の目は白黒。

「今日はもう帰ったほうがいいよっ！ こんな時間だしっ！」

こんな時間って…… まだ六時ですよ？

「両親が心配してるよ。まともな親なら、誰でも子のことを四六時中想っているものだからさ」

私は振り向いて、首を傾げる。

どういう意味？

「ほら、行きなさい！」

私はそのまま店の外に追い出される。振り向くと、彼はガラス壁の向こうで手を振って、また明日ね、と口パクで。

私は思わず微笑み、うなずいて、彼に背を向けて歩き出した。

ちらりと振り返ると、彼の視線とぶつかる。

笑っている彼の瞳。

また明日も会えますように。

それだけを想って、足を前へ伸ばす。

翌日。店に行くと、彼の姿はなかった。私は溜息を漏らす。

とりあえず中に入って、ジューシーチキンセレクトとアイスコーヒーだけを頼む。

椅子についたところで、

「ねえ、彼女、彼女！」

突然肩をつかまれたので、私は驚く。何っ！？

振り向くと、そこには金髪頭の学生らしきもやし男がにへら顔で立っている。

「君って聖上女子の子？ 見た目からしてすっげー讓様だわ！」

なにやらもやし君（仮名）はしゃいでいる。すると、彼の背後からわらわらと他の学生達がわいてでてくる。

「うわっ、讓様だっ！ 髪きれー」

「鼻長っ！」

「でも少し耳大きいね」

私は思わずその男子の鼻にストローを突っ込んでしまう。

「ふごっ！ 痛いっ！ 息が詰まる！」

「おいっ！ お前、こっちに鼻息吹きかけるなっ！ 鼻水が飛ぶっ！」

不良達は両手を頭上へ突き上げて、踊りだす。何、この人達？

やっとストローを抜いた（血混じり）男子が、半泣きで私を指差す。

「ひどいよっ！ なんでそんなことするのっ！？」

「黙れインポ」

その瞬間、全員が目を見開いた。そして、自分の股間を押さえる。

私は我に返り、あたふたとする。今、私は、何を……？

「ひどいよっ！ まだ試したこともないのにインポだなんてっ！」

その男子は股間を両手で押さえて、号泣。大体つかめてきた。

私は溜息をつく、素直に頭を下げる。

「すみません。なんかつい頭がもやしみたいで精力なさそうに見えるから……」

「もやしって言ったっ！？」

他の学生達にずるずると引きずられて、もやし君は私の前から去る。私は思わずすすくと笑みを漏らして彼らを見送った。楽しい人達。

でも、なんで話しかけてきたんだろ。

私が首を傾げながら前へ向き直った時、ガラス壁の向こうにちらりと薄茶色の髪が見える。

彼は私に気付くと、手を振ってくる。

私は思わず頬が緩むのを感じて、手を振り返した。

彼の顔を見た瞬間に、心が躍りだし、とくんととくんと鼓動が激しくなる。

彼は店に入ってくると、まっすぐ私に近寄ってきて、隣に座った。私は思わず、彼の口にチキンを突っ込んでしまふ。嬉しくて。あれ、何やってんだ私。

「ふーッ！ ふーッ！」

熱いのか、彼は口をもごもごさせながら、私の周囲を走りまわる。アイスコーヒーを差し出すと、彼は一気飲みする。うわっ、全部飲まなかったって！

「何すんのさっ！ 君みたいに口大きくないんだよ、僕はっ！」

彼は唇をさすりながら、目を細めて私を睨む。だって……なんか顔見たらついやりたくなっただもん……。

私の様子を見ていた彼は「これは僕の所為だな」と額に手を当てて嘆息する。

「僕のアホな部分が君に乗り移ったんだ。一刻も早く専門の医者に見てもらった方がいい。仲介料は五千円はどう？」

「馬鹿言っでないで、早くオーダー済ませてきてくださいよ」

私は彼の背中を叩いて送り出す。彼は咳き込んで、「もう僕の真似はやめて！」と涙目で叫びだす。

そして、店の一角を見た瞬間――押し黙った。

彼の目は見開かれる。彼の視線の先にいるのは、先ほど私に声をかけてきた不良達だった。

途端に眉が吊り上がり、彼は唇を引き結んで不良達を睨みつける。彼の敵意のある眼差しに不良達が気付き、色めき立つ。

「なんだ、あの目は」

「俺のかつこよさに嫉妬してんじゃねえぞ」

「いや、あれは俺を見てるんだ、きつと」

不良達は立ち上がるうとする。

すると、彼が言った。

「とつとこの店から出てけ、ゴミクスが」
「なに？」

わらわらと彼を囲みだす不良達。

「お前らのようなゴミは、この社会からとつと消えさせるべきだ。吐き気がするんだ、お前らのその腑抜けたツラが」

彼はすつと腕裾をまくりあげて、あの傷だらけの拳をあらわにする。

「やる気か？」

不良達が言う。

私は「やめて！」と不良達を掻き分けて、彼の腕をつかむ。すると、

「さっきの譲様じゃん」

「うそ、シヨックっ！ こいつの彼女かよ」

「もう俺の心の彼女に認定してたのに」

私は彼の腕をつかむと、強引に引きずって、不良の輪の外へ足を踏み出す。

「おい」

肩をつかまれる。

振り向くと、一人の男子が、私を睨みつけている。

「そっちから先に喧嘩売ってきたんだろ？」

「やめて」

私はまっすぐその男子を見つめて、言葉を遮る。

「彼を許してあげて。お願い」

私の懇願の眼差しに、その男子の顔が真っ赤に染まっていく。

「わかりました！ どうぞ、お通り下さい！」

「「おい！」」

他の不良がその男子の肩をつかむ。

「お前ら、わからないのか！？ よく見てみる、あの瞳を。あんな目をされたら、疼いてくるだろ？」

そう言われて、彼らはそつと私のほうへ振り向いた。

「マジだ」

「なんだあの、宝石のような目は」

「あれはきつとオパーズだ。いやアメジスト」

「いや、あれはラピスラヅラだ」

「ラピスラズリだろ」

私は急いで彼の腕を引つ張って、店の外に出る。

「おい、離せよ！」

彼の怒気のこもった声を聞いても、私は無言だった。

やがて店がかろうじて見える距離まで遠ざかると、彼に向き直る。
「どういうことですか」

私は彼をじつと見据えて、言う。

すると、彼の怒りに燃えていた瞳が、哀しみの色に染まっていく。
彼は俯いて、唇を噛みしめる。

「ねえ、どうして……」

私が彼の肩を掴もうとすると、彼は遮るように「ごめん」つぶやいた。

「僕が悪かった。どうかしていたんだ」

そんなことが聞きたいんじゃないのに。どうしてあんなことをしたのか、それだけを――。

「でも、はつきり言つて余計なお世話だ」

彼の言葉が私の胸を焼く。

私は目を見開いて、彼を見た。

彼は私に冷ややかな視線を向けて、「じゃあね」と歩いていってしまう。

私は彼の背中を見つめたまま、一人立ち尽くした。
初めての拒絶の言葉。

胸がきりきりと締め付けられて、涙があふれ出てくる。

私は、彼の心に踏み入る資格なんかないってこと？

彼と心を通わせたいとずっと願っていた。

けれど、それは結局私の自己満足な欲望でしかなかったのかな。

足元にどんどん染みが増えていく。

誰かが私の肩をつかんで、気遣ってくる。

そんな言葉なんかいららないのに。私はただ、彼の言葉だけが聞きたい。

翌日。放課後になって、ふらふらと帰り道を辿る。

霧がかった頭では、何も考えることができない。

どうしよう。今日、店に来てくれなかったら、私は。

考えてみたら、連絡先も何も聞いてないし、もしかしたらもう会えないなんてことも。

下を向いていたら、きつと涙がこぼれてきそうだったから上を向く。

太陽の光が目にしみる。

その時だった。数人の叫び声。ドラム缶の倒れる音。骨の折れるような鈍い音。

それらは路地裏から聞こえてきていた。

どうしよう。こんなところで、喧嘩？ 嫌だな、ホントに。

私は駆け足で通り過ぎようとする。けれど、ふと路地裏をのぞきこんだ時に——薄茶色の髪が見えて、足を止める。

……嘘。

一歩踏み込むと、すぐに視界が広がって、殴り合いをする学生の背中が見える。

その中心で拳を振る彼。

叫びだす学生の顎を打ち抜く拳。

腹を数度めりこませ、最後に蹴りを横面に叩き込む。
崩れ落ちる学生。

他の学生が逃げようとする。

彼は追いかける。

何度も何度も——顔を歪ませる。血しぶきが舞う。

——彼の拳の傷の意味。

——救急セットの用途。

何もかもを理解して、でも私は彼に声をかけられない。だって、その顔はどう見ても彼じゃなかったから。

彼がこんな顔をするはずがない。

いつもの無邪気な笑顔が跡形もなく消えていた。

これは嘘の世界。きっと私の見る幻で——。

学生達が泣いて許しを請う。

けれど、彼の拳は止まらない。

やがて学生が一人また一人とその場から逃げていく。

最後に残ったのは、彼の嘲笑。

そして、私を見つめる彼の苦笑の表情。

「一番見られたくないところを見られちゃったね」

彼は拳の血を手早く取り出した救急セットで処理する。

私の体は微動だにしない。視界が歪んでいるのは、きつと熱い涙のせい。

「僕はね」

彼は包帯を巻きながら、笑う。

「あいつらが許せないんだ。自分勝手な妄想だけを胸に抱いて、非行に走った拳句に人を傷つけるあの手が、本当に許せない。なんとかしてでもあの手を、顔を、壊してやりたいと思うんだ」

彼の言葉は深い感情がこめられていて、私の耳を破壊する。どうして。どうして……。

「あいつらは姉さんを犯した。あの醜い顔で嘲笑しながら、彼女を死に追い込んだんだ。だから、あいつらを許せない」

「だって、あれは関係ない人達じゃない」

私の声はからからに乾いていて、か細い。

「違うね。根本的なところはおんなじなんだ。あいつらの心を壊しておかないと。保険だよ」

「そんなの……ひどすぎる」

すると、彼の目が冷ややかな鈍い光を放ち、私を睨む。

「君はそう考えるだろうと思っていたさ。だって、君は『美里幸人の妹だからね』

その言葉が私の心をめった刺しにする。やめて。それだけは、言わないで。

「お前の兄が僕の姉さんを犯し、死に至らしめたんだよ。だけど、君は兄を嫌いにはなれない。実の兄妹だから。だから、不良には優しいよね、君は」

私は地面に膝をつく。あ。あ……。

「虫唾が走るね。僕の姉さんを返して」

兄さんは、比留間桜さんを犯し、自殺させた。

その名前だけは聞きたくなかった。どうして、彼が彼女の弟なんだろう。私を殺すための誰かの企みだとは思えない。

「君の顔を今ここで、歪めるか。それとも、地面に血を塗るほどの謝罪を僕にするか。どっちかにしてくれ」

彼が近づいてくる。

「兄さんは、」

私の言葉はどれも哀しみに震えている。けれど、心からの願いだけはこもったままだ。

「兄さんは自分の犯したことを悔いてました。だから、」

——自殺したんです。

「知ってるよ」

彼はそこで憎悪をかき消して、淡く微笑む。

「知ってる。けれど、どうしても許せないんだ」

彼は私の目の前で立ち止まり、そして手を伸ばしてくる。

そっと私の体を包み込む彼の腕。

「最初、君をあのお店で見かけた時、本当にびっくりしたよ。何度も写真で見ていた憎き男の顔と瓜二つだったからさ」

私の頬は濡れていき、彼の肩に水が染みこんでいく。

「でも、君は心まであの男の色には染まっていけない。ずっと君を見ていて、そう思ったんだ。毎日あの店に来て、文芸部の会誌を読む

君の微笑み。あれは穢れのない、心から嬉しそうな笑顔で」

だから、君を嫌いにはなれないんだ。

彼の言葉が、いつそう涙を滲ませる。

「もう、やめてください。こんなことは」

「うん、やめる。君にすべてを打ち明けたら、今までの自分を抹消しよう」と心に決めていたんだ」

よかった。……本当によかった。

「だからまた、あの店で会ってくれるね？」

私はうなずく。

すると、彼の腕が解かれて、私は彼の潤んだ瞳と向き合う。

「明日またあの店で会おう。その時に、僕の本心からの願いを話すから」

私はうなずく。

やがて彼は淡い微笑みを浮べてうなずき、歩いていってしまふ。

視界から彼の姿が消えても、私は涙を流している。

だって、すべてを知っていても、私を許してしてくれたことを知ったから。

兄さんの犯した罪を知った誰もが、今まで私を避け、私は一人ぼっちだった。

でも、彼だけは私と一緒にいてくれる。

初めて、彼の心に触れた気がする。それが本当に、嬉しいの。

私はある決心をした。それは、次にあの店で彼と落ち合う時、必ずこの想いを告げるということ。

この想いをいつまでも忘れずに私は生きていこうと決意している。彼のことが頭に離れない中で、それだけを私は心に刻み続ける。

そして、翌日、放課後になった瞬間に学校を飛び出して、あの店へ赴いた。

鼓動が激しいのは、走っているせいじゃない。

私の言葉を聞いたら、彼はどんな顔をするだろう。

どんな表情を浮べるだろう。

彼の答えがどんなものでも、私は構わない。この想いを、心からの願いを伝える——それだけが叶えば、十分だ。

店に、彼はいなかった。

ずっと待ち続けた。冷め切ったコーヒーの水面を見つめながら、ガラス壁越しに彼の姿を探す。

彼がこない。

どんなに待ってもこなかった。

それでも、絶対に私は席から離れなかった。

昨日の彼の言葉はきつと嘘じゃない。だから、必ず彼は来る。きつと——。

そして、薄茶色の髪が舞うのを見た。

彼はゆっくりと、本当にゆっくりと歩いてきた。いつの間にか、私のいる戸口と反対側の戸口から現れる。

彼の顔に浮かんでいるのは、穏やかな表情。

私の視界が歪んでいく。

頬を熱い雫が流れ落ちていく。

彼は私の隣に座り、テーブルに上半身を預けるようにする。

「待っていてくれたんだね。……聞いて欲しいんだ。僕の犯した罪を」

彼の震える手が私の頬をなで、涙を拭う。

……彼の罪。

そんなもの……だって、罪を犯したのは私の兄さんで、そして、悪いのは私達で。

「違うよ。全て、僕が悪かったんだ」

彼は目を伏せて、語りだす。

姉さんが犯されて。

路地裏で彼女は服を乱れさせたまま、儚げな笑顔を僕に見せて。そして、こう言った。

——この穢れた体でどうすればいいの。

——君のその純真な心で癒して。

姉さんは月日が流れてもなおその掠れた声で僕に向かってそれを言い続けた。

そして、ある晩、僕は姉さんの体を癒した。

血は繋がっていなかったことが一番の不幸だった。

彼女はやがて自殺した。

母親になることへの苦しみに耐え切れなかったんだ。

僕の命の灯火をその胎内に受けた彼女は、現実に心をめった刺しにされた。

「それが、僕の罪。姉さんを母にさせて、彼女を苦しめた。僕は君が思っているような人間じゃないんだ。とんでもなく卑劣で、自分勝手に、どうしようもなく男なんだ」

彼はそう言つて、本当に悲しげに笑う。

私は一体なんて言えばいい？　どんな言葉で、彼を癒せばいいの？

「僕はどんな言葉もいらないよ。君と会えて、それだけが僕の希望で、夢だったんだ」

そう言つて、彼の体が不意に揺れた。

翻る長い髪。

彼の体が落下して、床にひれ伏す。

地面の上を広がっていく血。

私は何か言葉にならない叫びを上げて、彼の前にかがみこむ。

制服がめくれて、ナイフが突き刺さった腹が顕になる。

「恨みは買つもんじゃないね。君との出会いがもつと早かったのなら」

私の涙が、次々と血溜まりに落ちて、波紋を広げる。

彼の瞼が落ちてくる。

それでも、彼の顔は笑顔だった。

彼がそこでふと、戸口へとふらつく視線を向けた。

そこに置いてあるベビーカー。

その中で、小さな消防車を握って満面の笑顔できゃらきゃらと声

を上げている男の子。

彼はそのベビーカーから私の顔へ視線を移す。そして、言った。
「君に、あの子の母になってほしかった」

それだけを言って、彼はこの世界から消え去った。
別れたくない。

それだけを私は心の中で繰り返す。

でも、もう時は過ぎて、命の炎は再び灯ることはない。
それでも別れたくなかった。

別れたくないのに。
だから、私は――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2190p/>

別れたくない.....

2011年11月15日17時35分発行